

暮らしを支えるケアのこれからを考える

訪問看護と介護



医学書院

2018年

1月号

vol.23 no.1

訪問看護と介護 第23巻 第1号(通巻第59号) 2018年1月15日発行 [ISSN 1341-7045 HOUJONKANGO TO KAIGO]



特集

在宅ケアの
質を高める、
“外縁”を広げる

|連載|「在宅ケア もっとやさしく、もっと自由に！」

100回記念対談

秋山正子さん × 山田康介さん

個別性に立ち戻り、やさしく自由な発想を！

在宅ケアの質を高める、
外縁を広げる

多死社会の看取りを支えるために

出前医療に力を入れて27年目を迎える。訪問

看護を機軸とした24時間対応の在宅医療は、当時きわめてめづらしかった。診療報酬上、往診の評価は低く、往診医は絶滅危惧種と揶揄されたものだ。しかし、最近是国家の保護政策で在宅医療に取り組む診療所も増え、往診専門クリニックまでもが増殖している。まさに隔世の感である。

とはいえ、今なお「なんで、在宅医療なんか始めたの」と尋ねられる。答えは単純明快。自宅で最期まで暮らしたいと望む患者と、それを支えたいと願う家族がいたからである。

市民の在宅医療の認識に、 地域差あり

さて、「人生の最期はどこで？」と問うさまざまな調査がある。これに対して、大部分の国民は「自宅」と答えている。それにもかかわらず、現実には80%近くが病院などの医療機関で、その命を閉じている。

いったいなぜだろうと素朴な疑問を抱いていた。世間では、往診する医者がいらないからとか、自宅で介護するなんて無理だからとか、在宅医療はまともな医療でないからだとか、いろいろな見解が憶測で語られていた。

医療法人アスムス理事長
太田秀樹

る結城市と西に隣接する栃木市に、それぞれ在宅療養支援診療所を運営しており、機能強化型在宅療養支援診療所として地区医師会と市行政と一緒に、地域包括ケアシステム構築に注力している。すると、同質の在宅医療や訪問看護を提供していても、看取りまでを支える在宅医療の「人気」は地域によってずいぶん違うことに気づく。在宅医療を信頼して選択してくれる市民の多いところ、そうでないところがあるのである。これは全国的にも同様の現象だった。そこで、「なぜ」に答えようと、2010年から3年間、社会技術研究開発センター（RISE TEX）から助成金をいただき、その背景を調